

動機づけの観点からみた「REFLECTION-BOT」の評価

Evaluation of "REFLECTION-BOT" from the Viewpoint of Motivation

甲斐 晶子* 松葉 龍一* 合田 美子* 鈴木 克明*

Akiko KAI, Ryuichi MATSUBA, Yoshiko GODA, Katsuaki SUZUKI

熊本大学教授システム学研究センター*

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University**

〈あらまし〉 留学生が日常生活における日本語使用について記録し振り返り活動につなげるためのLINE用BOTを開発した。動機づけの評価では特に記録忘れ防止の通知機能について肯定的な反応が得られ、本システムが低次段階の振り返り活動の継続促進に寄与する可能性が示唆された。

〈キーワード〉 日本語教育, 留学生, リフレクション, LINE, ARCSモデル

1. 序

「REFLECTION-BOT」(甲斐ら 2019)は、留学生が日本語使用についての気づきを継続的に記録するための疑似対話型入力システムである。日常生活における日本語使用頻度や遭遇した状況・場面と自身の対処等を記録し振り返ることで、次の学習計画へつなぐ意図で設計された。教員による質問・対話での促しと日誌形式での手法両面の利点を折衷的に取り入れており、低次段階の振り返り活動への寄与が期待されている。

本システムは留学生にとって身近で慣れたコミュニケーション・アプリである「LINE」を用いた点、Push型の通知機能で入力を促す点、対話型インタフェースである点、短い質問に短く回答する形式である点に特徴がある。学習者の自律性を尊重し能動的な記入を期待する姿勢は保持しつつも、記入忘れ防止用の通知機能を有する。その通知時刻は学習者が決められ、それにより学習者にとって都合が良い時間帯に記入を促せること、また自己決定することでより自分ごととして捉えることから、記録行動を起こしやすくなると期待されている。

本稿では、本システムに対する留学生の動機づけについて調査した結果を報告する。

2. 方法

調査の目的は本システムが記録に及ぼす影響を動機づけの観点から評価することにある。

対象者はLINEを常用している留学生4名(以後、S1~S4)である。参加者は振り返り習慣について回答した後、1週間のシステム試用を依頼された。試用後、動機づけに関する質問(5件法)および聞き取り調査が実施された。動機づけに関する質問はケラー(2010)のARCSモデルを参考に、ツール使用前の期待と使用後の感想を簡易的に尋ねたものである。質問項目を表1に示す。

3. 結果と考察

表2は参加者を日常生活での日本語使用についての記録習慣の有無別に、動機づけに関する質問への回答をまとめたものである。これらの回答について個別に説明を聞き取った結果を報告する。なお、斜体の箇所は参加者による口述をそのまま記述している(括弧内は筆者による補足)。

記録習慣があると答えたのはS2とS3である。S2は関連性を2点と答えた理由に既に記録の習慣があったので新たなものは不要だと思ったからと答えた。注意が3点と低く、自信は4点であることから、特に新しい道具の必要性を感じていなかったことが窺われる。しかし、試用期間は依頼した期間の倍である2週間の記録を自発的に行っており、聞き取りの中でこれまでの記録とは翻訳アプリで検索した際に残る履歴を指しており、振り返りとはその検索履歴をみる行為であると判った。本ツールへの記録および振り返り活動に通常授業以上の価値を見出したこと、また、通知機能が記録継続に有用だったと述べた。

S2:多分これの方が私はいいと思います。普通の授業と比べて、2週間の出来事を記録して知らない単語を見て、次の週に先生と話せるようになってもっと強く覚えられます。

S2:多分、今の方法は結構いいと思いますよ。自分が決めた時点でLINEが来れる。それはいいと思います。

S2:もし改善したいなら1日2回メッセージが来る、それもいいと思います。でも個人によってうさいと感じる人もいます。私は今ぐらいがちょうどいいと思いました。

S3が以前から行っていた記録と振り返りとは、日中スマートフォンのメモアプリに日本語の用法で自信が無いものを書き留めておき、夜に調べる日課のことであった。さらに週末にはそれらを

表 1 動機づけに関する質問項目

事前の期待	
(1)	[注意] 本システムで毎日の記録を取ることは面白そうと思った
(2)	[関連性] 本システムで毎日の記録を取ることは自分に必要だと思った
(3)	[自信] 本システムで毎日の記録を取ることはできそうと思った
事後の感想	
(4)	[満足感] 本システムでの毎日の記録はやってよかったと思う

まとめるための学習時間を確保しているという。S3 が事前の記録に対する動機づけ項目をすべて5点と回答したのは、既にその方法で記録の効果を実感していたためであった。一方、事後の満足感については3.5~4.5点と一意には決められないとした。その理由として、書きたいと思っていたことと質問内容が無関係に感じられた日は3.5点に下がったと説明した。学習者の中で振り返り方法が確立している場合、本システムの固定された質問項目は負の影響を与える可能性がある。

S3: 話したいことと質問が関係なかったときは3.5(点)。例えばその日勉強した授業の内容について話したい、それは授業についての内容です。その質問と関係ない。

S3: (自分のやり方は)役に立つ。私にとって個人にとって、以前勉強した知識を整理することは非常に多くなかったです。今回たくさん整理しました。(それは)4.5(点)。

S1 は元々記録や振り返りの習慣は無かったものの、それらの必要性は感じていたという。[自信]を5点と高く評価したのは、記録する習慣は無かったが、本ツールでなら記録できそうだと感じたためと答えた。その理由として、自分で決めた時間に通知する機能を挙げた。

S1: 自分の時間に合わせて11時に送ってもらって、バイト帰るときに、夜携帯を必ずチェックする時に時間を自分で設定できるのができそうだと思います。

S1: (昼の)12時だったら1回お昼忙しかったらそのまま忘れて入力できない時もあると思うんですけど(夜の)11時はちょうど自分で私にとっては一番携帯を振り返る良い時間帯だったので。

事前の期待感と事後の満足感に最も乖離がみられたのはS4であった(事前平均2.7点→事後5点)。S4は普段記録の習慣がないため、当初は本活動への興味が低かったと述べた。自己を忘れっぽく長続きしない性格だと分析しており、メモを取ることに苦手意識があった。しかし、事前予想と異なり一日も忘れることなく記録できたこ

表 2 動機づけに関する質問の結果(5点が非常にそう思う, 1点が全くそう思わない)

	記録習慣 参加者	有 無			
		S2	S3	S1	S4
事前	(1) 注意	3	5	5	2
	(2) 関連性	2	5	5	4
	(3) 自信	4	5	5	2
事後	(4) 満足感	4	3.5 ~4.5	5	5

とに満足していると述べ、継続できた理由に通知機能の存在を挙げた。通知があった時点では入力できなくても、スマートフォンに通知が残っていたため、後で思い出し入力できたという。

S4: やっぱり忘れることが多いから私自分で思う。でもたまに思い出そうとしたらもう何も出てこない、だから必要かなって思ったんですけど。

S4: 長続きしないから。私がメモをとるのが、2週間ぐらい過ぎたら忘れるとかよくあるから。

S4: 結構時間通りに入力してなかった。最初たぶん10時に設定したんだけど、時間通りに入れないけど。いつもLINE見てあっ通知きたなーってみたとき、また記録することができたので、これいいなって。

4. まとめと今後の課題

今回は少人数による評価であったものの、本システムによる記録については概ね肯定的に受け入れられたことが確認された。特に記録習慣が無く自信が不足した学習者にとって、通知機能が自信の向上に強い影響を与える可能性が示唆された。一方で、動機づけの質問項目については評価の根拠が各人によって大きく異なり信頼性が不十分であることから、ただ評価者の母数を増やし統計的処理を行うだけでは正しい解釈が得られないことが懸念される。学習者に寄り添った観察的評価と、それを踏まえた継続的かつ反復的な教育実践が望まれる。

謝辞

本研究はJSPS科研費16K21342の助成を受けた。

参考文献

- 甲斐晶子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明(2019)言語使用に関する省察促進を目的とした対話型入力ツールの設計と実装. C ASTEL/J(日本語教育支援システム研究会)2019年度国際大会予稿集, 75-78
- ケラー J. M, 鈴木克明監訳(2010)学習意欲をデザインする: ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン. 北大路書房, 京都